



TITLE:

南洋華僑觀

AUTHOR(S):

鈴木, 総一郎

---

CITATION:

鈴木, 総一郎. 南洋華僑觀. 經濟論叢 1942, 55(6): 705-711

ISSUE DATE:

1942-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/131733>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 經 濟 論 叢

第五十五卷 第六號

昭和十七年十二月

## 論 叢

經濟の本質について……………

經濟學博士 柴田敬

史記・平準書にあらは貨幣思想……………

經濟學士 穗積文雄

第一次大英帝國の崩壊とアダム・スミス……………經濟學士 白杉庄一郎

## 研 究

中小工業金融市場の構成……………經濟學士 田 杉 競

都市及農村人口の自然的繁殖力に就て……………經濟學士 青盛和雄

佛領印度支那の關稅改正……………經濟學士 河野健二

## 說 苑

保險に對する認識の發展と保險學の性格的變化……………經濟學博士 小島昌太郎

南洋華僑觀……………經濟學士 鈴木總一郎

## 附 錄

彙 報

本誌第五十五卷總目錄

## 南洋華僑觀

鈴木總一郎

華僑問題は日支事變の進展に伴ひ重慶政權の交戦力培養基の一として漸次注目せられ、更に大東亞戰爭勃發後我が南方作戰の進捗に伴ひ直接的の政策對象と化するに従ひ刻下焦眉の問題としてその關心を一層強めらるゝに至つた。かゝる重要性の増大に伴ひ、支那・南方問題研究の諸權威により精密なる研究が開始せられ、陸續として幾多貴重文獻が公にせられて、支那關係諸問題中華僑の問題は最も研究の進捗せる部面となつた。従つて問題は大小となく概ね解決せられてゐるが、私は私自身の研究上の立場より華僑の問題に迫り、この問題のもつ意義を解明したいと思ふ。こゝでは華僑問題を取扱ふ方法を決定することゝしたい。

華僑は一般に「國外に移住した支那移民並に其子孫」

南洋華僑觀

として規定せられ、法律上の國籍は普通之を無視する。本稿に於ては華僑 (Chinese abroad) の中特に南洋に居住するものゝみを研究の對象とする。アメリカ其他に在留する華僑が殆んどその大多數苦力勞働者であるに對して、南洋華僑は「南洋特產物たる護謨・錫・砂糖・米・煙草・椰子油等の生産と供給に重要役割をなすに止まらず、土人の生活に直接必要なる凡べての物資の配給網を獨占して」鬱然たる勢力を扶植して居り、一概に華僑といふも兩者はその性質上特に經濟的意義に於て嚴密に區別して取扱ふ必要がある。なほ政策の對象としても刻下我が國の特に關心を有するのは即ち南洋占領地の華僑であり、その意味に於ても他と峻別して取扱ふ必要がある。更にまた南洋における華僑は在留國別にすれば泰・佛印・馬來・舊英領ボルネオ・舊蘭印・比律賓等に分れ夫々その活動狀態に何らかの相違があるであらうが、而も之を總體的に見る時極めて同様な特色が発見せられ、且つ恰も之らが凡べて我が占領地域に該當するを以て、愈々これらを南洋華僑

として總括的に研究することを可能ならしめ且つ必要ならしめる。

南洋華僑の總數は六百五十萬人に上り、世界總數八百三十萬人の中で壓倒的地位を占めて居る。國別にすれば、泰・マレー・蘭印に集中され、各々二五〇萬人・一九六萬人・一三四萬人に達してゐる。而してこれら南洋華僑の出身地別統計によれば、廣東・福建省出身者が壓倒的多數を占め殆んどこの兩省に獨占せられてゐると見て差支ない。この點にも南洋華僑の特色がみられる。

### 三

華僑の經濟的勢力及びその地位はそれ自身在住國の經濟機構にとつての重要問題であり、従つて華僑に關する問題として注目せられるところであるが、華僑の國計送金もその巨額に達する故を以て、華僑出身地の經濟及び廣く中國の國際收支上の重要な問題であり、華僑の經濟的意義の大半はこの點に於て認められて來たのである。先づ華僑送金額の大きさを見るに、一八

七七年以來の累計は約百二十億元に達し、恰も同期間の入超累計とほぼ同額に達してゐる。(但し南洋以外よりの華僑送金を含む) 従つて華僑は中國の萬年入超的國際關係の最も有力な支持者たる地位を贏ち得てゐる。

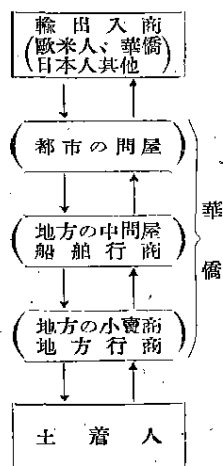
かくの如き巨額の送金が概ね華僑出身地たる福建・廣東兩省に送られるのであり、これがこの兩省の經濟生活に如何なる影響を與ふるものであるかは、國際收支上の問題と一應別個の問題としても極めて重要である。陳達の勞作が之を解明せんとしたものであることは斷るまでもない。この點に就ては、たゞこの小稿に於ては、華僑送金額の大きさを確認するのみにて足りる。

次に華僑の南洋諸國における地位を考察するに、一般にデッキ・パッサンジャーとして「赤手空拳」渡來せる華僑は、勞働者・行商・小賣商・大商店の四段階の發展過程をとる。この中、南洋諸國に於て重きをなすものは、中産階級としての華僑である。上層階級と貧民階級とが隔然として存在し、その間に中産階級の稀薄な南洋各地に於て彼等の占める地位は決定的である。

1) 1939年11月末、重慶政府僑務委員會調査。根岸信博士、華僑雜記、34頁。日本銀行調査局、東亞經濟事情、第12號、95頁等參照。  
2) 井田季和太博士、南洋と華僑、212頁。根岸博士前掲書151頁以下參照。  
3) 糟谷賢三郎、戰時支那經濟と華僑送金(上)(滿鐵調査月報 第22卷、第9號) 5頁。

いま南洋における華僑投資額をみるに、一九三〇年における英領マレー・蘭印・比律賓・佛印・泰國の五ヶ國總計に於て、農業九〇〇百萬圓・鑛業一〇三・工業二三八（生産業總計一、二九二）貿易並に物品販賣業一、八三〇・金融業七〇〇（商業總計二、五三〇）總計四、〇六四となつて居る。なほ華僑の職業別人口の割合に於ては、同じく福田氏の調査によれば、農業關係一七％、工鑛業關係二三％、商業關係五二％にて、商業部面に於て最も進出して居り、而も自己資本をもつ獨立經營者がその大多數を占めてゐる。商業について多數あるは工鑛業勞働者である。従つて根岸博士も肯定せられる如く、「華僑の基本的性格は、土民社會に於て、商業資本的、高利貸資本的な機能をも有してゐることは疑ふべくもない」。

華僑の活動の中樞體をなしてゐる仲介網組織について福田氏は極めて明快に説明を與へられてゐる。今それによれば「華僑活動の基礎的組織」は次の如くである。



即ち、配給及び集買の仲介過程を華僑は獨占し、この仲介過程を経ずに原住民との取引を行ふことは殆んど不可能の程度にまで仲介機構を固定的に華僑のみによつて作り上げて居る。而して華僑は「土人に對しては生活必需品供給者として、と同時に土產物購入者として立つて居るが、反面土人に對して高利貸として立つて居る。土人は一般に貧乏であるから華僑の供給する生活必需品を掛で買ふが此場合華僑は十二分な利益を以て販賣する。而して土人は其返済に當つて現金で支拂ふ事は困難であるから多くの場合土產物で支拂ふが、其評價は常に債權者たる華僑の一方的評價を以て行はれるから、時價を或程度迄無視した廉い値段で引取られるのが普通である。……然し乍ら、土人は土產

4) 陳達、南洋華僑與閩粵社會。  
 5) 福田省三、華僑(中央公論社編、支那問題辭典) 106頁。  
 6) 根岸博士、前掲書、38頁。  
 7) 福田、前掲書、105頁。

物を以て自己の多くの借金を一時に完済することは出来難いし、華僑もその完済を土人に迫りはしない。それ故、華僑と土人との關係は常に債權者と債務者としての關係に立つのである。土人は華僑の存在を如何に嫌惡しようとも其關係を斷ち切ることを得ず、華僑の意の儘に動かざるを得ないのである」。

右の如く華僑の原住民に對する關係は極めて緊密であり、之を無視して他の者が代替することは困難である。又輸出入商との關係に於ては、華僑は之より大なる信用クレヂットを獲得し、有形無形に密接な關係をもつのを通常とする。かくして華僑商人は南洋諸國に於て外國輸出入商社と原住民とを連接する必須的仲介機關としての牢固たる地位を確保して居る。南洋の經濟を論ずるに華僑を無視し得ざる所以である。

## 四

南洋華僑は殆んど一物をも持たずに故郷を出かけるものが多いが、彼等はその渡航せる國の何れたるかを問はず、支那出身地の風俗・習慣・制度をそのまゝ移

植するのを常とする。同郷主義・同業團結の如き即ちその最も著しきものであり、これにより華僑の在る處つねに一定の團結・結社を見るのである。今これを南洋華僑の中心的勢力たる華僑商人について看るに、彼等はまづ、或は福建幫或は廣東幫といふ如く出身地別に團結し、これに各取扱種目毎に行はれる同業團結を加へ、これらの上に統轄體として中華總商會を設けてゐる。華僑は凡べて自己に關係ある團體に加入し、加入せずばその地に止まり得ない。即ち華僑は華僑たるがためには常に一定の團體に加入せざるを得ない。換言すれば團體を離れて華僑は存在しない。同郷團體と同業團體とは入り交つて縦と横との結合體となり、華僑は互に何等かの關係に於て連接されてゐる環である。華僑はかくして連絡なき獨立せる個體の集合でなくして、種々の紐帶によつて相互に關聯をもつ統一ある團體を構成する。かゝる特質に鑑みて華僑の經濟的意義を理解するためには、私は之を統一體として把握すべきであると考へる。

換言すれば、統一體とは個々別々の多數の集合でなくして、縦と横とに連絡されその中の成員は凡べて他の成員と關聯づけられ、一部の動きは全體に何等かの波動を及ぼし又一部は常に全體によつて制約され、従つて全體として一定の方向と色合とをもつ如き統一的結合であることを意味する。

勿論統一體といふもその成員が凡べて同一の方向と色合とをもつものではない。例へば新家(第一世)と峇峇(第二世)との感情上における疎隔は人の知るところである。併しこれらは一定の循環器系統の中に白血球と赤血球とを含む如きものにして、かゝる對立あればとて一定の統一的機構を失ふに至るものではない。すなはち全體としては内にかゝる矛盾を包容しつゝなほ一定の方向と一定の性格とをもつものである。華僑の勢力・地位等の理解はかくの如き統一體として把握することによつて正當に行はれうるであらう。

現に一九二八年九月二十五日の佛印總督令は「海南幫・潮州幫・廣東幫・福建幫・客家幫の五幫を華僑同

業團體として公認し(幫は幫長及幫全員の連帶の責任に於て幫員の負ふ對人税の全額に對し、金錢上の責任を有す。幫が責任を負擔することを欲せざる個人の入團は拒絕することを得。拒絕せられたる者は追放せらるゝと規定し、代表的華僑同鄉團體を以て對政府責任團體たらしめて居る)如きは、華僑團體のこの種の特質を認識せることによる。

## 五

華僑の經濟的地位の判定は右の如き統一體として認識することにより初めて正鵠をうる。前に華僑の經濟的地位の牢固たることを一先づ觀察したが、それは個個の華僑の勢力の大きさやその算術的合計に於て理解するだけでは未だ不充分にして、かゝる統一體として華僑經濟機構が構成せられてゐる點にこそ華僑の經濟的勢力の大きさ及びその經濟的地位の強靱性を理解すべきである。すなはち例へば配給機構の一部を一部華僑の排除によつて改編せんとする如きは本來絶對的權力をもつに非ざれば不可能であり、また他の外來者が資本

の形大さや若干の犠牲的努力を拂ふことによつてその一部分に喰込まんとするも頑強なる反對に遭つてその豫期せる目的を達することは殆んど困難であらう。いはゞ自由經濟を地盤とせる資本主義的諸原理もそこにあつては充分に活動しえない如き封建的防壁に衝突するであらう。かくの如く華僑は或る統一體として結成せられて居り、その生命の根を斷つ如き經濟外的な權力によるの外は、資本的活動とか努力とかによつて部分的に破壊し難き強靱さを具有する。

併し乍らかゝる強靱さを賦與してゐる有機的統一體としての性質はまたその半面に於て自己の強靱性の限界をも同時に規定するものであることを知らねばならぬ。華僑を統一體として把握する時、仲介的華僑商人の團體は一方に於ては外國人である輸出入商と連絡し、輸出入商よりの信用クレジットその他の便宜を受けずしてはその商業仲介業務は確保されざる關係にあり、他方に於ては債權債務の關係により大小となく何らかの威壓的關係は保持しつゝも本來國籍を異にしてゐる原住

民との交渉により自己生存の源泉を獲得して居る。而して華僑は如何に成功するも原住民の信頼をうる事は絶對にない。かくして、華僑はその經濟活動の兩極に於て切斷される危険性をもつ統一體である。こゝに強靱性の限界があり、いはゞ生産財部門から隔離された支那民族資本の一般にもつ脆弱性と同樣な弱さをもつのである。商業活動が國家權力の發達と併行せず畸型的に發展せるものゝもつ宿命である。

華僑は、勿論商業部面に止まらず、更に商業網の一部分として精米所・スモークゴム製造所の如き土産物加工製造工場をもつ場合がある。<sup>11)</sup>しかし、この場合に於ても華僑を全體として理解する限り、その終端は依然として原住民との交渉部面にゆきつき、前と別様の關係としては出て來ない。

かくの如く華僑を統一體として取扱ふ時、華僑の強さは數量的大さを算數的に合した以上の勢力として理解せられ、而もその大さ若しくは強さの限界も亦明瞭に規定せられるに至る。

10) 支那内地における買辦との相違に注意。

11) 福田、前掲書、106頁。



次に、これを政治的關係としてみるに、華僑は本來政治的には無色・無力である。寧ろ無色・無力であつた爲に華僑は今日までの華僑たりえたのである。併し前述の如く經濟的に統一體を構成してゐるため、之を政治的統一體として利用されうる可能性をもつ。重慶政權の救國抗日運動への誘導の如きこれである。

これを、華僑の民族意識による自發的行動であると見る最近の多數の識者の觀方にはなほ多くの検討すべき節をもつものゝ如くである。こゝではこの點に深く觸れることを避ける。たゞ抗日資金の絶對的大さによる論證には法幣インフレーションによる相對價値の減小及び華僑の數量との比較即ち一人當りの負擔額並にそれと故郷への送金額との比較的考察などによつて、絶對額から来る巨大感を或程度まで修正する必要がある。また抗日運動を職業としそれによつて初めて生計の資を獲得してゐる一部暴力團の存在及びその脅威が華僑の統一體としての性質上直接的に且つ強力的に各成員にはたらく關係等を分析する必要がある、といふに止める。

兎も角政治的に統一體として利用される可能性は極めて大である。この故に、南方諸地域における我が對華僑政策もまた、こゝでは一應疑問のまゝ保留する華

僑イデオロギイの検討とにらみ合せて決定せられねばならない。個々の華僑のイデオロギイが問題たることに變りないが、そこに表面的にみられる各種イデオロギイの雜然たる總體としてではなく、在住國別に華僑を一つの統一體として把握して、全體としての方向・強度を確認して、これによつて對策の基準がまづ決定せられねばならない。

南洋華僑は諸種の特質をもつ。併しそれらの特質は凡べて華僑を有機的統一體として把握する時に、その方向と比重とを確認しうる。質辦と華僑の異同等もかかる觀點に立つて検討する必要がある。こゝではその具體的取扱ひは小論の都合上行はれてゐない。これは他の機會にゆづる。いふ迄もなく本小論は別段の新しき問題を取扱つてゐるものでない。たゞ私自身の研究上の立場より、華僑考察についての角度を決定したのに過ぎない。いはゞ、華僑についての序論たる役割をもつものである。